

近所の農家さん

よねくら
米倉

たかおみ
孝臣さん
(58)

(五日市地区)

米倉さんは49歳の時に、それまで勤めていたメーカーを辞め、義父の山下忠さん(85)が経営する山下養鶏場に就農した。



定年退職後のセカンドライフに、養鶏場を継ぐ構想をしていたが、義父母が元気なうちに義父を助け養鶏場を継続させたいと就農を決意した。

現在、国産種の採卵鶏「さくら」「もみじ」と「東京うつけい」など成鶏7,000羽、ヒナ3,000羽を飼育する。毎朝、卵約7,000個を集卵し、生協を中心に、JAの直売所、大田市場、鶏舎に隣接する自動販売機で販売している。

飼料にこだわり、原料は国産を使う。魚粉やニンニクな

ど約20種類の人工物を含まない国産原料と、分別生産流通管理済み(遺伝子組み換えでない)のトウモロコシを使用している。2日ごとに直径3mほどの大きな攪拌機で混ぜ合わせて1回に1.5tの飼料を作る。

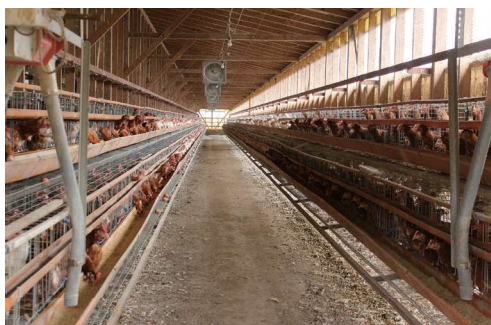
季節や鶏の日齢によっても飼料の配合を変えている。エネルギーを多く消費する夏や冬はカロリーを高めにし、成長期の若い鶏はカルシウムを多くし、動物性たんぱく質を抑え、ゆっくり成長させている。米倉さんは「早く成長させると、早く卵を産むようになるが卵が小さくなる。日齢に合わせた栄養管理はとても重要」と話す。

採卵鶏は生後の日齢で呼び方や管理の方法が異なり、日齢0〜60日頃を幼ヒナ、60〜80日頃を中ヒナ、80〜130日頃を大ヒナと呼ぶ。山下養鶏場では幼ヒナを仕入れて育成する。最近では、卵を産み始める直前の生後130日ほどの大ヒナを仕入れて飼育する養鶏場も多いが、仕入れ時の値段の安さや、産まれた直後から

同じ鶏舎で育てるため、病気が少ないなどのメリットもある。何より義父が、ヒナが大好きで大切に育てているからだ。



幼ヒナ



自然の風が流れる鶏舎

飼育環境も大切にしている。米倉さんは「自然に近い環境を作るよう開放鶏舎で換気を良くし、自然の風が流れるようにしたり、夜は電気を付けずに鶏がゆっくり眠れるようにしている。うちの鶏は睡眠時間

たっぷりだ」と話す。

飼料、育成、飼育環境にこだわり、ストレスの無いよう育てられた鶏は、殻の厚みや大きさが十分ある美味しい卵を産みだす。自動販売機やJAの直売所でも評判で、山下養鶏場の卵を求めて来店する固定客が多い。

今後の課題は、現在使用している機械類や飼料のタンク、鶏舎など全て義父の代に導入したものであり、老朽化に伴い徐々に入れ替えが必要になること。集卵作業など、求人を出しているが人手が足りないことだ。「時代に合わせ、規模の縮小なども検討しながら、しっかりと養鶏場を継続できるように経営していきたい」と話した。



鶏舎に隣接する直売所と卵

